生誕200年
記念展

鍋島直正公

ごあいさつ

十代佐賀藩主鍋島直正公（閑叟／一八一四～七一／藩主在任一八三〇～六一）は、財政の立て直し、藩校を通じた人材育成、科学技術革新による軍事力の増強や西洋医学の導入など、新規事業を積極的に推進し幕末佐賀藩を全国有数の雄藩になした名君として知られています。名君として直正公が語られる上での象徴的な存在が、大正二年（一九一三）、生誕一〇〇年を機に建設された銅像でした。ところが昭和十九年、大戦の影響により銅像はわずか三十年で供出され、銅像に隣接して昭和二年に郷土博物館として開館した徴古館も閉館します。

銅像建設から一〇〇年。当館では平成二十五・二十六年度の二ヵ年にわたり、生誕二〇〇年を記念した直正公関連企画展を七回にわけて開催しており、本書には三回の内容をまとめました。一〇〇年前の直正公顕彰を辿るとともに、一〇〇年前には語られなかった直正公の人間像にも触れる本書が、平成二十九年再建予定の銅像とともに、今後に直正公を語り継ぐ上での一助となれば幸いです。

平成二十六年九月十四日

公益財団法人　鍋島報效会

目次

ごあいさつ ―― 1
目次・凡例 ―― 2
図版・解説 ―― 3
第一章 ◆ 幕末佐賀 名君誕生 ―― 3
第二章 ◆ 鍋島直正の側近たち ―― 39
第三章 ◆ 閑叟公銅像 ―― 75
略系図 ―― 112
略年表 ―― 113
マップ 御城下絵図に見る幕末佐賀藩士 ―― 116
出品リスト ―― 118

凡例

一、本書は、十代佐賀藩主鍋島直正公生誕二〇〇年記念事業として、公益財団法人鍋島報效会が主催し、平成二十五年度および平成二十六年度に徴古館において開催した関連企画展のうち、次の三回の展覧会の総合図録『生誕二〇〇年記念展 鍋島直正公』である。

第六十四回展「閑叟公銅像」(平成二十六年一月十四日〜二十六日)
第六十六回展「幕末佐賀 名君誕生」(平成二十六年五月十九日〜七月五日)
第六十七回展「鍋島直正の側近たち」(平成二十六年七月二十八日〜九月十三日)

一、資料の順序は各テーマに従って配列し、陳列の順序とは必ずしも一致しない。

一、資料解説の表記は、出品番号、名称、員数、作者、時代・年代、法量、品質・形状、所用者、指定名称、解説の順に記した。また古文書などには適宜、常用漢字による釈文を付し、図版部分を「　」で示した。

一、公益財団法人鍋島報效会所蔵で、佐賀県立図書館寄託の鍋島家文庫資料については、(鍋〇六〇－一)などのように請求記号を記し、同文庫の絵図資料には絵図整理番号を記した。

一、執筆は公益財団法人鍋島報效会(徴古館副館長　藤口悦子、学芸員　富田紘次・中神明夏)が行い、編集は藤口・富田が行った。

一、図版の写真撮影は富田が行ったほか、久我秀樹(久我写真事務所)、東京大学史料編纂所、株式会社とっぺんによる撮影写真を用いた。なお早稲田大学大学史資料センター所蔵資料、佐賀県立図書館所蔵資料はそれぞれ同機関より、また佐賀県医療センター好生館所蔵資料は、佐賀県立佐賀城本丸歴史館より画像の提供を受けた。

一、鍋島直正は幼名の貞丸のほか、斉正、閑叟など、時期により名乗りの変遷があるが、本書では基本的に「直正」で統一し、銅像はじめ後世の顕彰に関する場合は「閑叟公」を用いた。

本展は一部、佐賀市の平成二十六年度徴古館を活かしたまちづくり推進事業の助成を受けている。

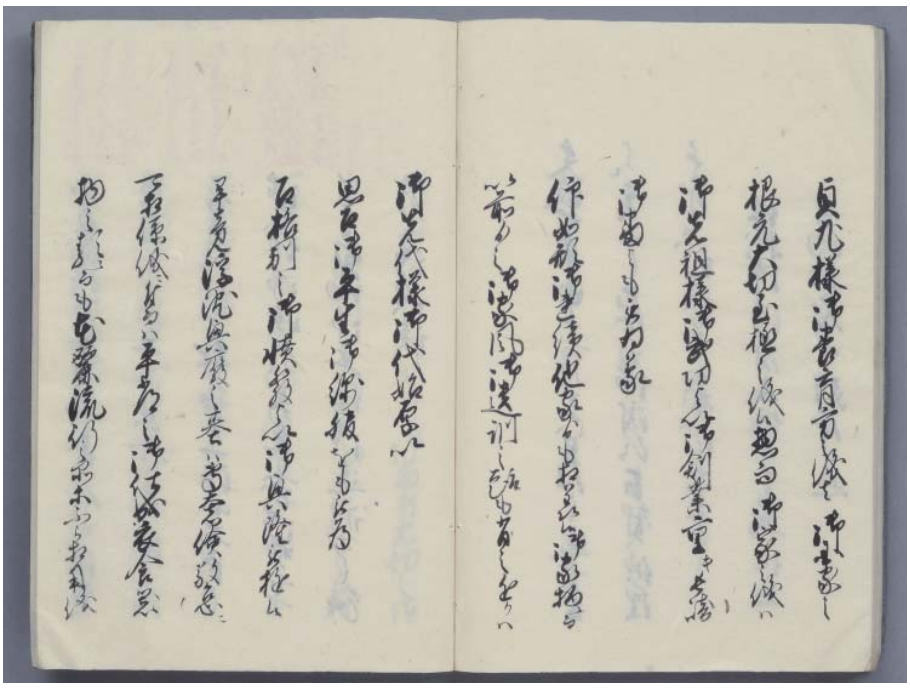
第一章 幕末佐賀 名君誕生

鍋島直正(幼名貞丸)は、文化十一年(一八一四)、
江戸桜田の佐賀藩上屋敷で誕生し、
二歳〜十二歳の成長期を溜池の中屋敷で過ごし、
盛姫との結婚を機に再び桜田に移った。
十代佐賀藩主となった十七歳で初めて佐賀に入り、
以降、四十八歳で隠居するまで、
佐賀藩の新規事業を積極的に推進した
「名君」として知られている。

この若き名君は、いかにして誕生したのか。
両親である九代藩主鍋島斉直・幸姫夫妻をはじめ、
幼年期のお付きの老女磯濱や、
学問上の教育係である侍講の古賀穀堂から
どのように育てられ、
また彼らに対して直正はどのような想いを抱いていたのか。
周囲の人物との関わりを通じて、
直正の生い立ちから藩主就任までの歩みを辿る。

13 先祖の遺訓を学ぶ

「貞丸様御附頭其外江相渡置候書附写」一冊
文政七年（一八二四）
縦二六・二cm 横一八・三cm
紙本墨書 冊子装
公益財団法人鍋島報效会所蔵（鍋〇六三－一七）

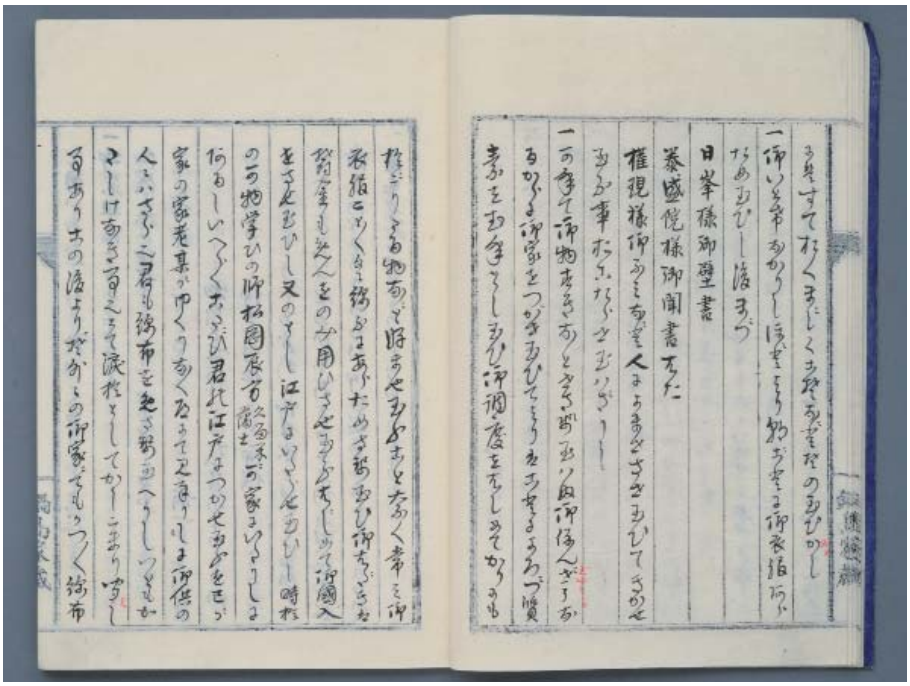


「貞丸様（直正）御養育方の儀は、御国家（佐賀藩）の根元、大切至極の儀候」として、藩から御側頭の古賀穀堂らに出された通達が載せられている。

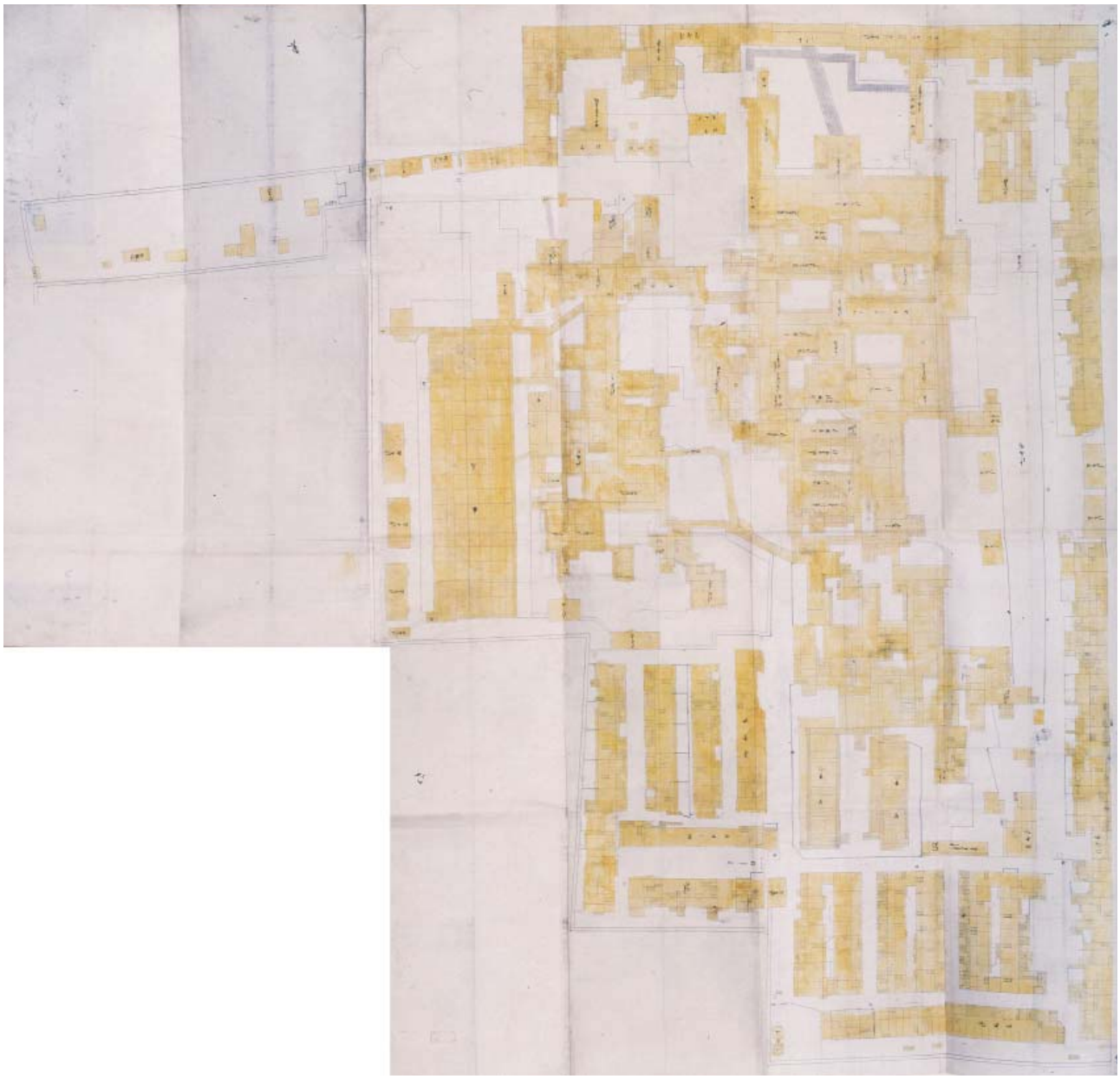
佐賀藩は先祖の武功により創業して以来、長崎警備の仰せを蒙り他家より羨ましく思われる家柄であり、「以前より御家風・御遺訓」がある。そこで貞丸には「質実厳正」な性格に育つよう「只今之内より漸々御養育」すること、また文武稽古はもちろん、歴代藩主の年譜や遺訓などを熟読することが肝要とされている。このとき貞丸十一歳、藩主としての教育が進められていた様子がうかがえる。

14 朝の習慣

「古川松根筆記」一冊
古川松根 著
江戸時代後期
縦二六・四cm 横一八・四cm
罫紙墨書 冊子装
公益財団法人鍋島報效会所蔵（鍋一〇九－七）



幼少期よりお遊び相手として直正の側近くに仕えた古川松根が記した直正の言行録。その中で松根は、幼少期の直正の朝の習慣に触れている。毎朝の着替えがすむと直正は、（一）「日峯様御壁書」＝藩祖鍋島直茂が定めた掟、（二）「泰盛院様御聞書」＝初代藩主鍋島勝茂の談話をまとめた聞書、（三）「権現様御ふみ」＝初代将軍徳川家康の文章などを人に読ませ耳で聞くことを習慣としていたという。のちに嫡男の直大（十一代藩主）が初めて江戸に出立する際、父・直正が餞別として渡したのは、自らが幼少期に熟読していた直茂壁書と勝茂聞書だった。



20

桜田 佐賀藩上屋敷

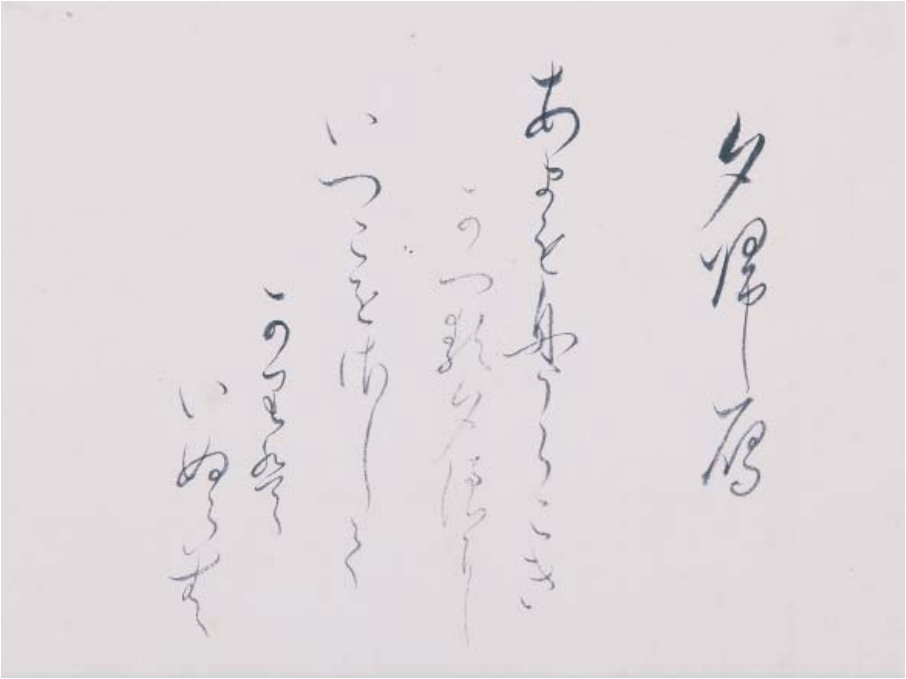
「桜田御屋鋪指図」一鋪
嘉永三年（一八五〇）
縦一八〇cm 横一八〇cm
紙本着色
公益財団法人鍋島報效会所蔵
（鍋島家文庫 絵図・全－九三四）

佐賀藩の江戸桜田上屋敷は歴代藩主夫妻の居宅として用いられ、正室幸姫の子である直正もここで誕生した。二～十二歳までを溜池中屋敷で過ごした直正が桜田に戻ってきたのは、文政八年（一八二五）十一月九日。盛姫との婚儀直前のことだった。

桜田上屋敷では将軍徳川家斉の姫君である盛姫を迎えるための大規模な増改築が同年までに行われた。新御殿の完成を待って婚儀が整い、世継ぎながら直正・盛姫夫妻が桜田上屋敷を居に定め、九代藩主斉直・幸姫夫妻は異例ながら溜池中屋敷に移り住むこととなった。

45 和歌書「夕帰雁」

一幅
九代藩主鍋島斉直室・幸姫　筆
江戸時代後期
縦三一・九cm　横四三・八cm
紙本墨書　掛幅装
公益財団法人鍋島報效会所蔵



蓋表に「齊直公君夫人御染筆」、蓋裏に「天保四年癸巳五月蒙　御附頭之台命勤役中賜之　朝倉孫右衛門長経」と墨書があり、幸姫直筆の和歌を、天保四年（一八三三）に御付頭の朝倉長経に下賜されたものとわかる。冬鳥のなかでも雁は哀れ深いものとして好まれ、多く和歌に詠まれる。

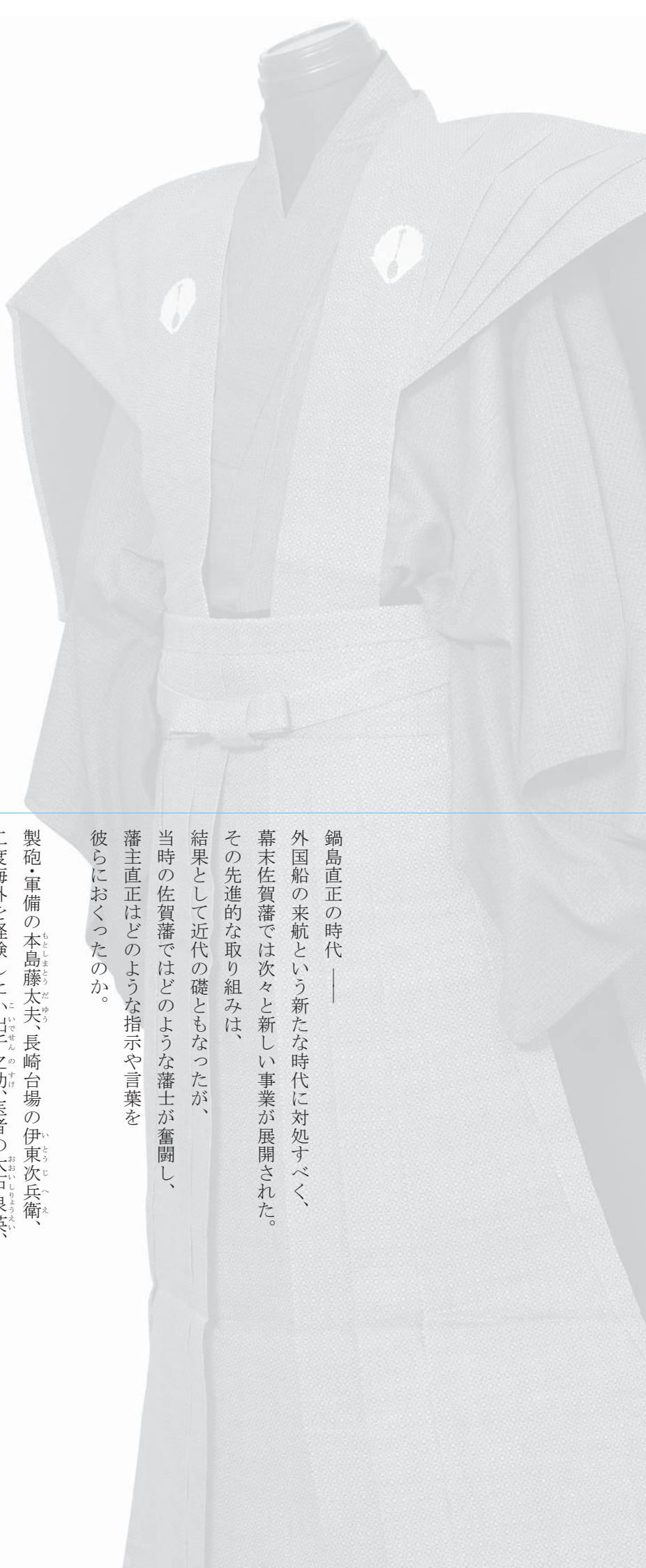
［釈文］
夕帰雁
あまも舟うらこき
　かへる夕浪に
いつこをさして
　かりは
　　いぬらむ

46 村梨子地杏葉紋揚羽蝶紋散鼻紙台

一基
江戸時代後期
高さ二二・七cm　縦二九・三cm　横一九・七cm
木製　漆塗　蒔絵
九代鍋島斉直室・幸姫　所用
公益財団法人鍋島報效会所蔵

鳥取藩主池田家より九代鍋島斉直に嫁いだ幸姫（一七八八～一八三七）の婚礼調度のひとつ。鍋島家の家紋である杏葉紋と池田家の家紋である丸に揚羽蝶紋を表す。基台と天板裏には銀を用いて工夫する。

幸姫実妹の弥姫は薩摩藩主島津家に嫁いでおり、子息である島津斉彬と直正は従兄弟である。ともに殖産興業や西洋式軍備拡張につとめた開明的な藩主としてよく知られている。（巻末略系図参照）



第二章 鍋島直正の側近たち

鍋島直正の時代――
外国船の来航という新たな時代に対処すべく、
幕末佐賀藩では次々と新しい事業が展開された。
その先進的な取り組みは、
結果として近代の礎ともなったが、
当時の佐賀藩ではどのような藩士が奮闘し、
藩主直正はどのような指示や言葉を
彼らにおくったのか。

製砲・軍備の本島藤太夫、長崎台場の伊東次兵衛、
二度海外を経験した小出千之助、医者の大石良英、
札幌開府の島義勇、また藩政の中枢にいた鍋島茂真（安房）や、
古川松根、徳永傳之助、千住大之助ら直正近侍の動き…。
藩主直正のもとで事業を推進した藩士たちの群像を紹介する。

48

鍋島小紋裃

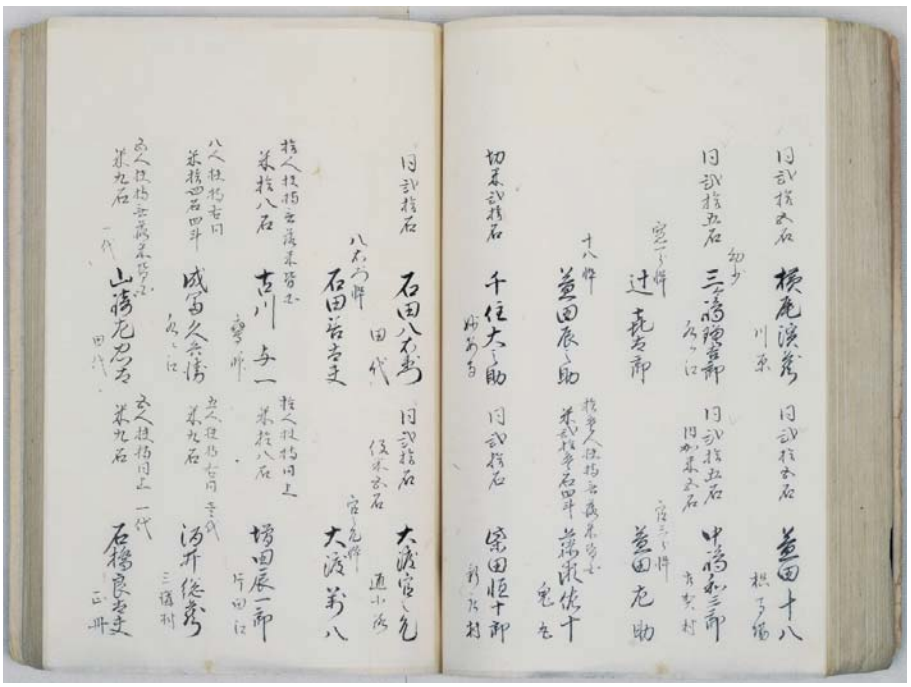
一領
江戸時代後期
肩衣丈八七・五cm　裄三八・八cm
袴丈九二・〇cm
麻　小紋染
鍋島直正　所用
公益財団法人鍋島報效会所蔵

三所に杏葉紋をつけた直正所用の裃。将軍家や大名家は裃に用いるための専用の柄（お留柄）を定め他家にその使用を禁止した。佐賀藩では、胡麻殻の断面と七曜を組み合わせた柄を用い、これを鍋島小紋と呼んでいる。

部分拡大図（原寸大）

49 幕末藩士名簿

「弘化二巳総着到」二冊
弘化二年（一八四五）
縦二六・二cm　横一八・〇cm
紙本墨書　冊子装
公益財団法人鍋島報效会所蔵（鍋三三一－六二）



本書巻末に記されている合計によると、総記載者数は八〇三五名だが、七五四三名との調査報告もある（下図参照）。いずれにしろ幕末の藩士名簿類のうち、記載者数が最多の名簿である。当時の佐賀藩では軍事力強化のため、居住地を含む家臣団の実態を細かに把握する必要があった。

そこで佐賀藩（本藩）直属の藩士を十五組に分け、各組ごとに所属藩士の姓名・石高・居住地等が記されている。市佑組に千住大之助（切米二十石）・古川松根（米十八石）、播磨組に本島藤太夫（切米四十石）、杢之助組に伊東次兵衛（切米五十五石）など。

佐賀藩家臣団の構成

『続佐賀藩の総合研究』第四章第四節「家臣団の編成と構造」（吉川弘文館、昭和六十二年）による。

佐賀藩主　鍋島家

家臣団は自立的

大配分（11家）

「大配分」とよばれる上層家臣（11家）は、藩主直属家臣団とは別に、自立的な家臣団を編成していた。これらの家臣団は、「弘化二年惣着到」の記載対象外。幕末の他の名簿によると、その合計藩士数は、9,035名。

9,035人（合計）

三家	小城鍋島家（1,701人）	蓮池鍋島家（1,005人）	鹿島鍋島家（680人）	
親類	白石鍋島家（804人）	神代家（川久保）（562人）	久保田村田家（508人）	村田鍋島家（472人）
親類同格	武雄鍋島家（882人）	多久家（884人）	諫早家（1,221人）	須古鍋島家（316人）

家臣団を直接統率

藩主直属の家臣団（15組に編成）

大組頭	大組頭の石高	侍	手明鑓	御徒	足軽	その他	合計藩士数	各組所属の本書第三章関係人物
鍋島主水（横岳鍋島家）	3,000石	111	82	0	263	0	456人	
鍋島弥平左衛門（神代鍋島家）	2,500石	61	37	190	353	357	998人	永山十兵衛／中村彦之允
鍋島孫六郎（深堀鍋島家）	2,400石	119	77	0	257	38	491人	
鍋島周防（坊所鍋島家）	2,000石	117	49	0	241	0	407人	張 玄一
鍋島志摩（倉町鍋島家）	1,900石	120	63	0	260	0	443人	原田小四郎
鍋島播磨（太田鍋島家）	1,700石	66	46	138	355	333	938人	本島藤太夫／杉谷雍助
鍋島　左太夫	600石	122	48	0	221	0	391人	
成富十右衛門	600石	178	104	0	192	175	649人	
鍋島市佑（納富鍋島家）	600石	68	57	0	155	68	348人	千住大之助／古川松根
岡部　杢之助	500石	123	43	0	217	0	383人	伊東次兵衛
石井　勘解由	500石	88	123	0	191	0	402人	
坂部又右衛門	400石	176	118	0	194	0	488人	
大 木　主 計	310石	110	62	0	249	0	421人	
深江六左衛門	300石	92	47	0	250	0	389人	
鍋島隼人（松浦伊万里）	270石	68	50	0	148	73	339人	徳永傳之助

7,543人（合計）

52

鍋島直正和蘭船乗込図（なべしまなおまさおらんだせんのりこみず）

一巻
古川松根　筆
弘化元年（一八四四）
縦三〇・〇㎝　横一三八九・五㎝
紙本着色　巻子装
公益財団法人鍋島報效会所蔵

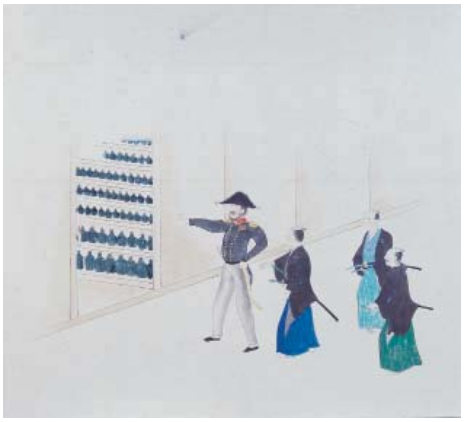
天保十五年（一八四四）、オランダ国王の開国勧告書を携えた使節船パレンバン号（軍艦）が長崎に入港すると、直正は長崎警備のためにぜひ軍艦の構造を知っておきたいと長崎奉行に申し出て乗込みの許可を得る。本図は直正が乗込み視察をしたときの様子を、随行した古川松根が描き十八図にわたって記録したものである。

第1図　パレンバン号に乗り込む
直正は、五色の幕を垂れる最も大きい船に乗船（緋色幕の船の前）。パレンバン号の水兵は、帆柱で登攀の礼を行う。

第2図　ラッパの演奏で歓迎

第3図　船内での歓待
艦長室に通されたのは、赤地袴の直正と近習・通詞の十人。使節・艦長が応接。銘酒・菓子が饗される。

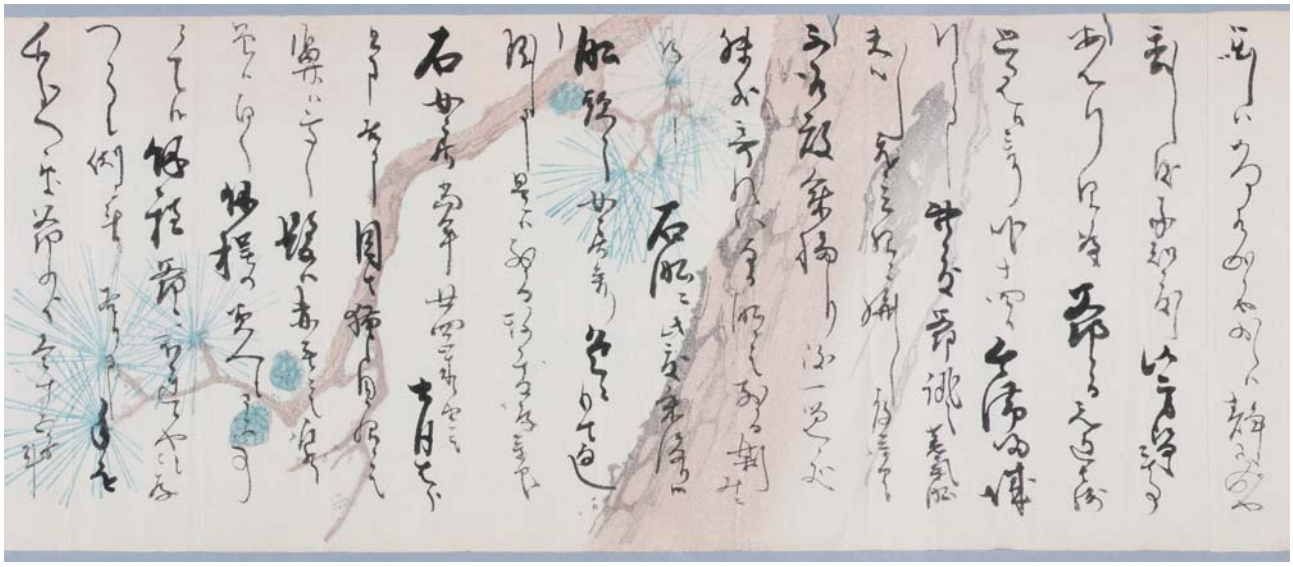
第6図　背嚢の棚
中甲板の一室。四段の棚に並ぶのは、水兵らが上陸の際に衣糧を入れ、肩にかけて背負って用いる「背嚢」。



第7図　薬品室
大小のガラス瓶を整然と貯蔵。直射日光が入らない暗室のため蝋燭が点火されている。

第10図　酒庫
板壁に穴をあけ、その中に酒樽が納められている。暗室のため蝋燭に点火して案内。

第11図　貯水庫
鉄製の大きな箱をつくり、船底に水を蓄える。

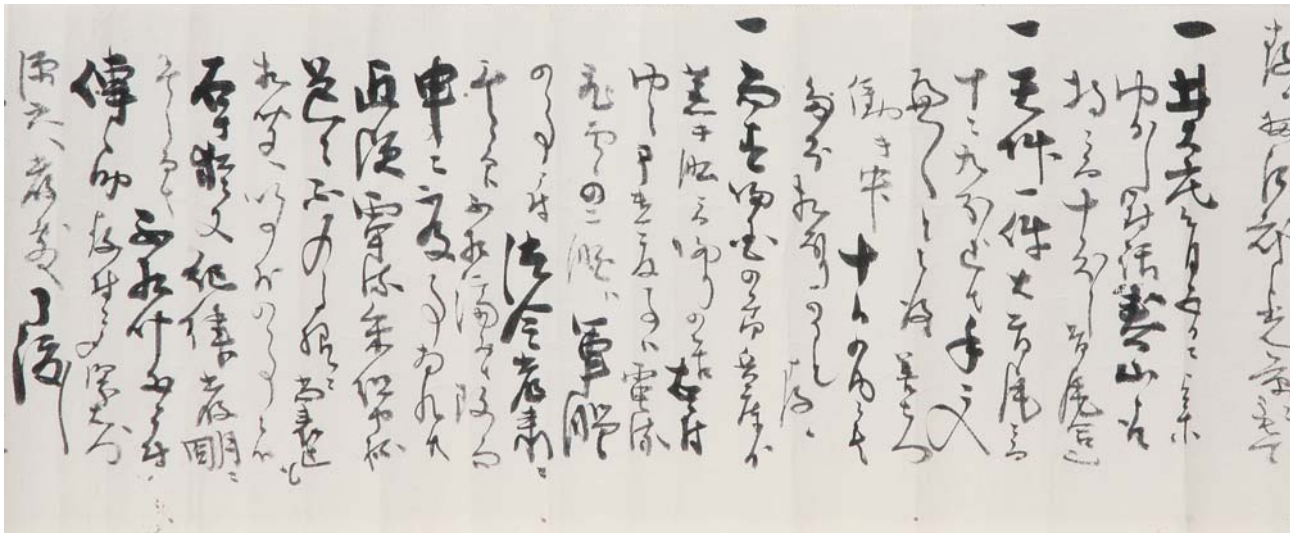


67

鍋島直正書簡 貢姫宛

一通
鍋島直正 筆
安政五年（一八五八）
縦一七・二cm 横一三一・九cm
彩箋墨書
公益財団法人鍋島報效会所蔵

約二〇〇通現存する長女貢姫に宛てた直正の直筆書簡の一つ。安政五年（一八五八）オランダに注文していた蒸気軍艦（電流丸）が長崎に回航され、長崎巡見中だった直正はすぐに乗船。「それはそれは飛び立つように嬉しく」と待望の軍艦到着の喜びを表し、オランダ人艦長夫人とのやりとりも詳細に記す。実の娘だからこそ心情を素直に吐露できたのであろう。



68

鍋島直正書簡 徳永傳之助宛

一通
鍋島直正 筆
安政七年（一八六〇）
（本紙）縦一七・八cm 横一二六・六cm
（封筒）縦一八・四cm 横四・四cm
紙本墨書
公益財団法人鍋島報效会所蔵

直正が江戸から側近の徳永傳之助に宛てた直筆の書簡。来月の参勤交代で初めて電流丸を用いるという。電流丸購入から一年数ヵ月が経ち、濫りな乗船もあると聞こえてくるため乗組規則の制定を指示している。また軍港としての活用を考えていた天草（肥後国）の入手話がうまく進み「九割は手に入ったようなものだ」と伝えているが、約半月後、協力的だった井伊直弼が桜田門外の変で暗殺され、幻となった。

（封筒）

第三章 閑叟公銅像

直正の生誕から一〇〇年を迎えた大正二年(一九一三)。
その風姿を永劫にわたり知らしめ欽慕の念を仰がせんがため、
大隈重信を委員長とする委員会が組織され、
県内外からの約十万円にのぼる寄附金により銅像が建設された。
高さ四メートルを超える巨像として、
閑叟公は北御堀端(佐賀市松原)から佐賀を見守ることとなった。
この美挙に対し十一代鍋島直大は、
銅像除幕式の日に県内初の公共図書館「佐賀図書館」を落成し、
県民への謝意を表した。

しかし、銅像建設から三十年。
第二次世界大戦中の金属供出のため、
昭和十九年に閑叟公は「出征」した。

そして、銅像建設から一〇〇年。
徴古館の隣に銅像が建っていたことは、
次第に佐賀の人々からも忘れ去られようとしている。
本章では、残された古写真や銅像模型等により、
今はなき銅像の風姿とその偉業を偲ぶ。

98

96
銅像除幕式

一枚
大正二年(一九一三)
縦二一・三cm　横二七・〇cm
ゼラチンシルバープリント
公益財団法人鍋島報效会所蔵

97・98
銅像除幕式

「閑叟公銅像除幕式アルバム」　一帖
大正二年(一九一三)
(アルバム表紙)縦二一・〇cm　横二七・〇cm
(写真本紙)縦九・五cm　横一三・六cm
ゼラチンシルバープリント
公益財団法人鍋島報效会所蔵

銅像除幕式 佐賀市民空前の大熱狂

大正二年(一九一三)十一月十日、佐賀市民待望の銅像除幕式の日。旧佐賀城下の家々には祝意を表す国旗が翻り、鍋島家の家紋杏葉紋の献燈が掲げられた。夜に入ると電燈・ガス燈等により献燈は燦然と輝いて「不夜城」が現出し、各中学校三〇〇〇人の生徒による提灯行列が銅像園から旧城下を練り歩き、長い長い「大火龍」が現れたという(資料No.100「閑叟公御銅像除幕式概況其他報告書」)。

各町は競って電飾や作り物を凝らし、唐人町は道筋に沿って南北に引いた電線に電燈を灯し、赤松町は新道通りとの境に「榮城」と扁額を掲げた門を建て、新馬場では特設舞台上に昆布と箸で作った松樹、陶器の亀、スプーンとナイフでこしらえた鶴の作り物などを設けた。銅像園一帯には牛嶋町出店の茶店、蓮池町・柳町共同の装飾物陳列所、その前では紺屋町主催の相撲も開催され、旧城下外の村々からは浮立が順次披露され各所を練り歩いた。この日から数日間の松原一帯は、人の肩と肩が触れ合う程の空前の人出になったという。

大正二年落成 佐賀図書館

県内外からの寄附金により閑叟公銅像が建設されたことに感謝した十一代鍋島直大(直正嫡男)は、佐賀県の文教発展のため、直正が教育にかけた遺志を受け継いで利用してほしいとの願いで佐賀図書館を開館した。これが佐賀県内で最初の公共図書館である。

この図書館が、藩校弘道館跡地にほど近い場所に建設されたことに、かつてここで学んだ大隈重信は、「感興を深くした」と落成式の挨拶のなかで述べている。

運営には、鍋島家が直接あたったが、昭和四年(一九二九)に佐賀県に移管された。昭和三十八年には城内の現在地に新築移転され、これを機に鍋島家伝来の文書・典籍類約三万三〇〇〇点が「鍋島家文庫」として鍋島家より寄託され、一般の利用に供されている。

銅像園（どうぞうえん）

大正二年（一九一三）閑叟公銅像が佐賀市松原に建設されたのを契機として、周辺一帯は銅像園として整備された。

佐賀図書館（大正二年）、弘道館記念碑（大正十二年）、徴古館（昭和二年）、佐嘉神社（昭和八年）などが次々と建設された。

かつて直正が整備した藩校弘道館にほど近い文教の伝統が漂うこの地区は、佐賀県下の文教振興の象徴的なエリアとなった。

略系図
略年表
マップ
御城下絵図に見る幕末佐賀藩士
出品リスト

謝辞

企画展開催ならびに図録作成にあたり貴重なご所蔵品を出品頂き、またご協力・ご助言頂きました左記の関係機関、関係各位の皆様に厚く御礼申し上げます。

（敬称略）

佐賀県立図書館
佐賀県立佐賀城本丸歴史館
佐賀県立博物館・美術館
佐賀県医療センター好生館
早稲田大学大学史資料センター

千住　昌
佐藤　静江
古賀　裕之
大園隆二郎
石橋　道秀
伊東　久智
今川　恭靖
江口　智徳
大嶋　公子
大塚　清吾
川上　力
竹下　正博
永松　亨
藤井　祐介

生誕二〇〇年記念展
鍋島直正公

編集・発行　公益財団法人 鍋島報效会
〒八四〇-〇八三一
佐賀市松原二丁目五-二二一
TEL　〇九五二-二三-四二〇〇
URL　http://www.nabeshima.or.jp

発行年月日　平成二十六年九月十四日
印　　刷　㈱佐賀印刷社

本書の全部または一部を無断にて転載・複製することを禁じます。
© 二〇一四　公益財団法人鍋島報效会

1814～2014

Birth 200-year commemoration

徵古館

The Museum CHOKOKAN

NABESHIMA